

立地区の沙田神社や、鷹狩の地である本城村や松本市の多賀神社や筑摩神社を訪れたかは不明で、省略されている。

太郎像は『唐糸草子』（信濃教育会出版）では、塩筑教育会館にある像や、新村出身の画家西原比呂志が描く太郎が紹介されている。源池小学校の像も、寝そべっている姿である。多田道太郎『しぐさの日本文化』では、寝ころぶ姿勢は不作法で、みっともないとはいえないとし、「私の好きな架空人物の一人に「物くさ太郎」がいる。（中略）どういう姿勢をとっていたのであろうか。そんなことが気になる。仰向していたのか、それとも片ひじついていたのか。」としぐさに興味をよせる。そして『物くさ太郎の空想力』で、草子の伝える冒頭の立派な屋敷について、そういう家に住みたいという太郎の空想力で、「人間『物くさ』太郎にならなければ空想ができないという、おもしろい法則がここにあらわれているような気がします。」と記す。想像力と空想力のちがいはさておき、一つの興味ある草子の読み方である。

こうして太郎への関心興味は、文学者によって様々である。このほかにも自殺した富士正晴や、心中した太宰治や、妻をめぐって世間を騒がせた谷崎潤一郎など、多くの人が御伽草子や太郎を注視している。

最後に新村出身の長岡昭四郎『新・ものぐさ太郎物語』を紹介して、太郎を成長させるための糧にしたい。はじめ異端児あつかいだった太郎も村人たちと仲よくなる。それは太郎が寝てばかりいたのではなく、村のなかを歩き村人たちに声をかけて親しくなったからだと解する。

さらに記念碑の近くにある小野神社について「やはり物くさ太郎

にゆかりのある社やしろというふう言い伝えられている。」と記している。

また、柳澤孝雄新村公民館長などの尽力により、北原白秋作謡、草川信作曲の「物臭太郎」が見出され、話題をよんでいる。

白秋によれば、

「物臭太郎は欲知らず

お空の向うを見てばかり

桜の花を見てばかり」

というのである。

る。地獄極楽の仏教画を説明する比丘尼などの、草子の絵解きをすすめる唱導的な過程に、話のひろがりをも想定する。

折口信夫は「死者の書」といった小説や歌集を多く出したから、太郎についても松本大学近くの碑に、釈道空の名で歌を詠んでいる。いにしへに物草太郎ありし後ものくさひとの一人もなし

先に記した古刹長興寺では、柳田国男を呼んで「話をきく会」が発足、民俗学に関心のある胡桃沢勘内、池上喜作、矢ヶ崎奇峰など地元の人々が熱心に活動したから、折口信夫もそうした関係で太郎の歌をのこすことになった。

地域で成長する太郎

この釈道空の「ものくさひとの一人もなし」の歌とは裏はらに、太郎に対する関心は地域住民の間で、文化事業として精力的に継承されている。各地に創られた太郎像や、祀られているモニュメント類を考慮して催された「ものくさ太郎サミット」などはその典型である。サミットとやゝオーバーに称した企画は、新村公民館の企画になる「ものくさ大学」の一環として平成一五年松本大学で開催された。

超空の歌碑がある場所で、ものくさ祭りが例年おこなわれる新村地区のほかにも、太郎にゆかりのある穂高町、島立地区、本城村の住民代表が集い、各地域での太郎への関心の度合など情報交換の場となった。

この太郎にまつわる各地へは、たとえば岡部伊都子が訪れて『御伽草子を歩く』（新潮社昭和四八年）にまとめている。

本曾路から松本電鉄で新村駅に降りたつ前に岡部伊都子は松本民芸館の丸山太郎から「ズクなし」の知識を得る。そして新村公民館から案内してもらって「物草太郎の碑」の周辺を次のように記録する。「あたりは田植を終えた水田と、たばこの畑や、ぶどう棚などがつづく。桜は何の種類か、葉が細い。高原らしく、かつこうが鳴く。」そして水田のなかにある二本松の太郎碑を写真におさめる。

太郎へのイメージは「惰民、遊民、ヒッピー族の元祖であるか。足や手のあかがり、のみ、しらみ、ひじの苔、世間的な優等生のきれいな姿とは正反対だ。「支配者の指令に従わぬ自由」としての徹底的ものぐさには、醜汚に包まれた強烈な自我がある。」とする。さらに寒い冬を路傍の小屋でしのぐ太郎に、「単なる懶惰えんたとはいえぬ気丈な太郎の精神力だ。ものぐさというは人目が定める評価。人に見ないところでの行動は、自律の自足である。」とみる。

次に、岡部は穂高へ行き「穂高神社、背後に迫る古墳の主は誰だろう」と写真にそえる。「太郎はおたが（穂高か）大明神、女房はあさい（朝日か）権現になったという。「恋せん人は、自らが前にまゐらばかなへんと誓う」神。世間的評価にたじろがぬ純粹の太郎が一目で気に入った女房は、美貌のみならず内容にもたいそう密度の高い女人であった。太郎の直感はずるどい。」とし、最後に「地頭に対しても女房に対しても、気儘をとおした太郎の不屈の面魂。実際にはなかなかここまでずうずうしくなりにくい。たとえ徹しきれたとしてもなお解決できぬ寂寥がある。」という旅を経ての感想である。

この『御伽草子を歩く』でとりあげているのは太郎だけでなく「酒吞童子」「鉢かづき」など全国的だから、太郎にゆかりのある島

警戒しなければならぬが、とにかく太郎に「寝ころぶヒマのない、大衆のあこがれの象徴」をみていることは確かだろう。

このように花田清輝は太郎に「わたしの年来の理想的人間像」を擬装し、「ゴロリと寝ころぶ」という精神を、もっと納得のいくように説明するためには、もっとあくせく働かなければならないのかもしれないが——しかし、わたしは、むしろ、ゴロリと寝ころぶという行為のほうをえらぶことにしたい。」と結論する。

民俗学の立場から

柳田国男が言及するのは「隣の寝太郎」（『柳田国男集』八巻『全集』6）で「今ある草子の『物草太郎』が、いつの頃何れの地に於て結集せられたかは、単に伝本の系統を究めたばかりでは、之を推定することが六つかしいやふに思ふ。」と言ひ、現存の「物草太郎」が純乎たる書き卸しであるか、筆録以前にこの話が固まっていたかは、昔話を職業とする人の参与にかかわると推測する。具体的には旅する法師や「盲人の所管に属していた」と推測する。

それから太郎のイメージを寝太郎聲に比定する。長州厚狭あさに伝えられる寝太郎荒神の由来なども参考にして。寝太郎は三年の間寝通して貯えを食いつくす惰け者であるが、工夫して大河の水をひき荒地を開発して成功する話である。木下順二の「三年寝太郎」劇にみられる原型である。同様の話を柳田国男は出身地兵庫福崎町あたりの、隣の寝太郎を聲にとれ、との話を回想して加えている。そのほか奥州で寝太郎という代りに、ならず者と呼ぶそのならず者が、長者を欺いて一人娘の聲になる話ほか沖縄など全国各地の寝太郎物

語に注目する。

柳田国男が注目する寝てばかりいる太郎のイメージは、一寸法師のような小さき子説話とも、桃太郎のような英雄譚とも、鶴女房などの異類求婚譚ともちがって、現実味をおびたものである。大金持の長者の所へ聲入りして居直れば、博打聲入でもないかぎり寝太郎暮らしは現実可能であろう。

この注目には、播州の松岡家から明治三四年に二六歳で飯田市の柳田家へ養子に入り改姓したと関係しよう。むしろ大審院判事である法曹界の柳田直平が義父であるから、一般庶民の聲入婚とは同一に論じられないにしても。この年柳田国男はすでにエリート官僚であり、小諸で島崎藤村と会う文学青年でもあったから、養子縁組は複雑な思いがともなつたであろう。

松岡から柳田へ改姓した微妙な心理からか物草太郎も「古語のモノウシが、名詞形のモノウサを中に置いて、モノグサシと謂ふやうになつた」と改名による太郎の誕生だ、とも追記する。

また太郎の話を伝えたのは信州出での法師かと推測した理由として、物語の最後の一節に穂高大明神の示現や、善光寺如来の申し児が語られるからだと言ふ。「私の想像が当って居るならば、信州は特にあの草子の世に出る以前から、既に物草太郎の昔話が流布して居た国」とする。

全国各地を旅行調査した柳田国男だが、昭和初期はとくに信州での講演が集中した。昭和四年ころより、塩尻市の長興寺で菅江真澄を中心に関心をよせたのを機に、太郎説話への論文も用意しはじめ、「聲入考」に続き「隣の寝太郎（昭和五年）」論発表にいたる。

折口信夫しのぶも「お伽草子の一考察」（全集1収）などで関心をよせ

おろしている。長編小説『渡辺崋山』の労作を発表したあとの太郎に対する感想である。

杉浦明平の視点

杉浦明平は『小説渡辺崋山』を「朝日ジャーナル」に昭和四三年から連載するに先だち、『戦国乱世の文学』で「中世の鈍い照りかえし」との視点で物くさ太郎もとりあげている。太郎の求婚にしても「太郎は、どこまでも、しつこく追いまわす。その虚飾をしらぬ野蛮でひたむきなエネルギーはたいしたもの、けっしてへなへな貴族出の色ごと師ではない。おそらく御伽草子数百編の登場人物の中で、これほど実質的に息長く走りまわれる人はいないのでなかろうか。はたしてこれが物くさ太郎なのであろうか。むしろ中世の主人公である名主層のチャンピオンではなからうか。」

このように太郎の野性的なエネルギー、田舎者の木曾義仲のような無骨で都に対抗するようなエネルギーを絶賛する。

杉浦明平自身、渥美半島の田舎で農業と地方政治にかかわりながら、三七〇〇枚におよぶ『小説渡辺崋山』ほか、地域のドキュメント、ルポルターージュを精力的に書き続けた自分自身のエネルギーを省みての、太郎への共感だったにちがいない。

記録文学を重視した杉浦明平だったから、太郎説話にも「デタールに若干のリアリティがあり。」論理性は欠くが、大衆の社会意識、中世的でない部分も反映されているとみる。

もっとも草子全体では「そのために御伽草子（中世小説）百数十篇を読みおえたとき、『古譚百種』や『デカメロン』やサケッティ

や『狐物語』の読後におこるからりとした陽気さや腹の底から高笑いがおこるところか、もやもやした非合理的な空っぽ、ときには、人身御供を要求していたらしい修験道的もしくは原始宗教的ともいうべき陰惨な感をさえまぬがれることができない。」とルネッサンス文学にも精通していた杉浦明平の感想がそえられる。

花田清輝の発想

花田清輝の気鋭の評論『復興期の精神』と、一味ちがう『もう一つの修羅』に収められている「ものぐさ太郎」論も杉浦明平と同じように乱世の文学に関心を示した花田清輝の魅力的な側面が示されている。

太郎が「地頭が、そばをとおりかかって、大地にごろりと寝ころんだまま、身うごきさえしない」姿に、花田清輝は、「暴力にたいて非暴力をもって立ち向かうこともまた、やはり、まぎれもない抵抗」と非暴力的積極行動を太郎にみる。大衆の非暴力的な抵抗のシンボルをみようとする。大衆のエネルギーに注目する点は、社会変革の階級論を念頭におく杉浦明平と二人は共通する。

花田清輝は、怠けることと働かないことはハッキリ区別すべきで「無関心、無気力、不決断」とちがって「ゴロリと横になってい度胸」に主眼をおく。

ここには花田清輝の、鹿児島や京都での学生時代に、飢えながらもゴロリと横になって乱読し、翻訳のアルバイトなどで日を過ごした自分の半生を重ねあわせての言辞がある。もちろんこれらの花田清輝流のシニカルな、一筋縄ではいかないレトリックによる誤読を

的要素が少なかったから、国文学者にとって好都合で研究するうえで幸した。

ところで、そうした研究の進展にともなって、多方面に関心がひろまっていく。そうした現象の一端を近代文学の例にみることにする。

それが太郎の再生であり成長であるかは検討を要するにしても、太郎の反響は現代にも示唆するところ大であろうと思う。

藤森成吉の関心

藤森成吉は昭和一五年に、ものくさ太郎についてラジオ放送した。その経験を小説風に「左門の放送」と題して『大原幽學』（筑摩書房昭和一五年）に収めている。それによれば「故郷の先達物臭太郎を扱ふことは、作者十数年来の懸案であった」と跋で記しているほどだから、かなり興味を示していたとみられる。であるから大原幽學や由利公正の戯曲集であるにかかわらず、「左門の放送（小説）」と目次に掲げて収めることになった。

もっとも出版業をスタートしたばかりの筑摩書房にとって、藤森成吉の全日本無産者芸術連盟（ナップ）の委員長、ハリコフ会議後の逮捕といった経歴からして、発禁を避ける意味でも、太郎の放送を入れることに、臼井吉見も積極的だったと思われる。

それはともかく、小説の内容は次のようだ。藤森成吉は話すことが苦手なのに放送を引受けたことを悔みつつ、放送用原稿を巻紙に書き、時間をにらみながら妻の前で練習する。「物臭太郎といふのは、御承知のやうに『浦島太郎』や『一寸法師』と並んだ御伽草子

の一つですが、この、他愛ないといへばいへる素朴な昔話は、解釈の仕方でいろいろ面白い問題を含んでみると考へます。」と藤森成吉は切りだし、太郎は乞食であるが「そんな境涯で豪華な空中楼阁を描いてゐるところ、不精者の本質ともいへますが、詩人の本質を備えてゐるともいへるでせう。」と当時多かつたアナーキスト詩人をイメージしている。そして物臭も徹底していること、地頭が知っているほど太郎は有名な人物だったことに注意し、「自分に適した職業でないかぎり梃てびでもうごかず、矢鱈働くを能と考へず、地頭にさへ敢然楯つくところ、むしろ張りのある人間」と高い評価をくだす。

ここには、有名だった藤森成吉が第一回普通選挙に労働党候補者に推されて落選したり、労働者の経験をするとして工場で働いて話題となったりした、ほろにがい体験を追想しての感慨がよみとれる気がする。

太郎が京で妻問する場面では「恋愛はひとを馬鹿にもしますが、また伶俐にもします」と言い、太郎の出世の話は軽視して「太郎は信濃の生粋の太郎で野育ちの詩人で、充分です」と結ぶ。最後に「一たい何でこんな話をする気になったか、と左門（成吉）は思った。「いろいろ面白い問題を含んでゐるから」？それは人間が自己を見出す動機や、詩人が天分をつかむ経路などか？むしろ、矢鱈「働け」といふ意見に対する抗議か？作家の弁護か？或は特に自分のやうな野人的作家や故郷の人間の生きかたの興味か？」こうして失敗に近い放送を終える。失敗したが、これこそむしろ物臭らしいじゃないか？物臭太郎は今も生きてゐるのだ。と藤森成吉は自分を物くさ太郎に投影して小説風、エッセイ風の「左門の放送」を書き

女性は逃げ帰る。太郎がかわした相聞歌をヒントに女の家をつきとめたのち、邸宅の縁の下に隠れて迫る。

太郎が深草天皇につらなる子孫であることも判明して結婚が成立し、甲斐信濃兩國を所領する長官となり、めでたい話として完結する。

ここには南北朝時代からの内乱で戦場になった花の都を逃れ失脚した貴族の貴種流離譚、立身出世談、求婚談、古代から和歌にみられる歌垣の伝統につらなる贈答歌といった要素を内包している。

だから王朝文学の要素をのこしながらも、難解な内容ではなく、表現も平易だった。太郎の出世物語に下剋上の時代を反映して、新興の大名をはじめとする公家以外の新しい読者が親近感を示したと思われる。戦国大名の周辺にいたお伽衆も、めでたい話として楽しみながら朗読したであろう。本文の終りにある「毎日一度、此さうしを讀みて、人に聞かせん」云々とあるように、自信のほどをみせている太郎物語である。

もっとも古典の大部分と同じく作者は明らかでない。けれども公家、連歌師、僧侶、隠遁者などが記録していったと推測される。

したがって太郎の生誕地も口承や作者によって錯綜するのは自然だったし、信州に関する話にしても太郎のほかに様々な御伽話類が記録された。ことに本地物と分類される仏菩薩が仮の姿であらわれる本地垂迹説に影響された縁起譚である。諏訪大明神や戸隠神社、木曾御嶽権現の縁起にまつわるものである。なかでも多いのは当然善光寺に関する話で、流行病の娘を如来像で救うとか、継母の虐待から出家して成仏する話とか、時代を反映した信仰を中心とする物語である。

こうした御伽話類のなかでも、太郎のユーモラスともいえる処世術、ないし幸運の物語は人気を博し、江戸時代の川柳のネタにもなっていて顔をみせる。

物ぐさ太郎へ母灸をすゑる（誹風柳多留）

黒猫を物草太郎抱いてゐる（川傍柳）

労咳すなわち、肺結核に対して灸をしたり、黒猫を抱けばいいという浮世絵にあるような迷信があり、億劫がる者をもっている。

また浄瑠璃では、太郎を千利休に重ね合わせて仮装脚色し、その延長で歌舞伎化もされる。謀反を企てたとして討たれる事件からみ、討手に差しむけられた太郎は、利休の妻などとはかり、仮装人物となって活動するドラマチックな主人公となる。したがって頼な無精者の太郎ではなく活動家に変身している。

とにかく江戸時代、刊行時に出版者によって彩色の絵入り本である丹緑本など、奈良絵本の伝統にそっていつそう普及していった太郎の人物像は、明治以降も人気の的となり近代文学に彩りをそえることになる。

物草太郎ごろ寝せし草枯れはてぬ（信濃歳時記一九六五）

川柳のほかに、文学者の太郎観をみることにする。

近代文学にみる視点

明治以降「御伽草子」に関する研究は国文学者を中心に盛んになった。複製、論文、講座など参考文献は大変に多い。多くの古典籍を収録した『群書類従』や『続史籍集覧』をてはじめに、戦時中にかけても盛んに調査研究がなされた。御伽草子には反権力的な思想

物くさ太郎の成長

Some Considerations on How Monogusa Taro Grew up (According to the Legend)

腰原 哲朗

御伽草子にみる誕生

ものくさ太郎が登場するのは『御伽草子』においてである。室町時代から江戸初期にかけて作られ伝承された、およそ五百篇に上る物語類をおさめる。一寸法師、浦島太郎ほか二人の皇子との恋愛で有名な和泉式部、ヤブ医師の代表である竹斎などをアイロニカルに脚色した話など多種多様であるが、なかでも物くさ太郎は人気がある。

室町期に生まれた多くの話の中から二十三篇をえらんで、江戸時代に「御伽草子」と名づけて出版されるにおよんで、この名称が定着する。印刷術の発達で木版本として刊行されたから、ものくさ太郎の話は一般に流布していった。江戸時代初期に刷ったと見られる版木四一枚が京都市下京区の仏光寺で見つかったというニュースが平成一五年の現在も報じられる状況にある。「御伽草子などの印刷は京都で始まったとされるが、版木が見つかったのは初めてで、書誌学上の意義は大きいと注目されている。」(「日本古書通信」第八九二号)

こうした写本や版本が流布する過程で、物草や物臭といったように表記も多様になったが、ここではたんに太郎とする。御伽草子で語られる太郎の半生はおよそ次のようである。

東山道の末、信濃国十郡の筑摩の郡あたらしの郷に住んでいる。東西南北に池を掘り中庭には百種の花が咲き乱れ、金銀ちりばめられた豪邸である。

こういう記述から一転して、竹を四本立て、こもで囲った掘立小屋に、足手あかぎれのままノミ、シラミにたかられて物も食わずに臥せているホームレスの太郎である。

小鷹狩の途中に通るかかった地頭の左衛門尉に、ころがっている餅をひろうように、鎌首もたげて頼む太郎である。あげくのはて、馬から下りて餅をとることをしない地頭に対し、ものくさな殿だと腹をたてるしまつだ。

この有名なエピソードのあと、村人たちの要請で人夫の代表として京都に行くことになる。

京で任務をはたし、帰郷するに際して結婚をめざす。太郎は辻に立ち掠奪婚へ走る。清水寺でのストーカー行為である。

通りがかかった美貌の女性に対しセクハラにおよぶ好色ぶりなので、

物くさ太郎の成長

Some Considerations on How Monogusa Taro Grew up (According to the Legend)

腰原哲朗

目次

- 御伽草子にみる誕生
- 近代文学にみる視点
- 藤森成吉の関心
- 杉浦明平の視点
- 花田清輝の発想
- 民俗学の立場から
- 地域で成長する太郎